

○ 昭和30年代までは、牛乳・乳製品用途を混合した一本の生乳価格で乳業に出荷し、乳業側が用途を選択。

生乳は、仕向用途別に価格変動の要因と、価格水準が相違。

例えば、生乳は腐敗しやすく需給と価格が乱れやすいが、価格は国内の需給により決まる。

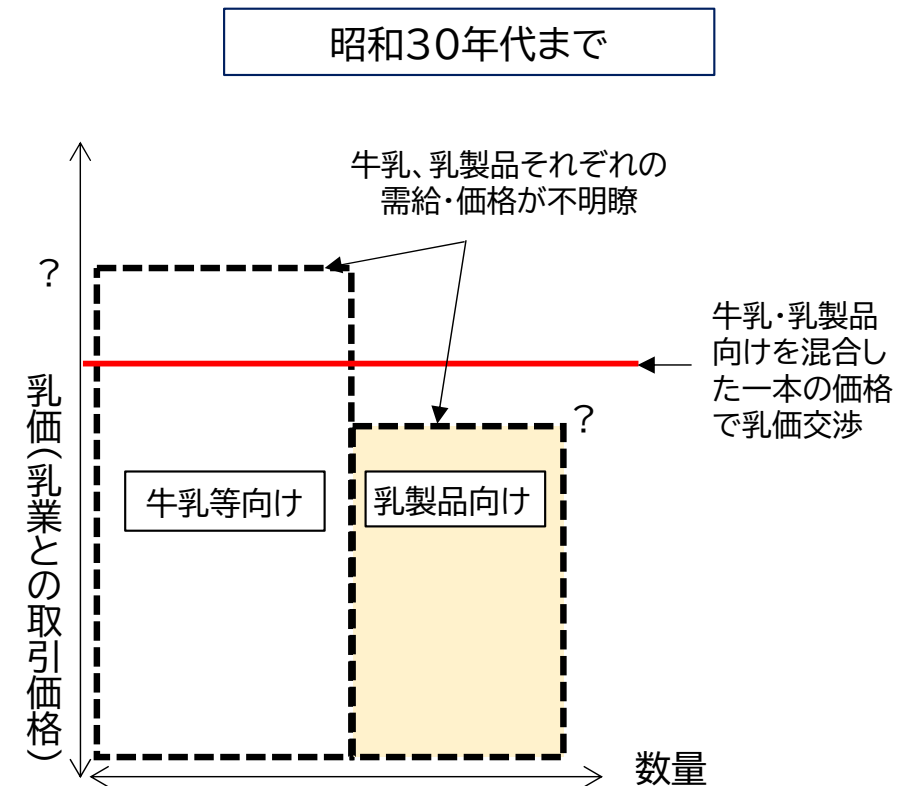
一方、乳製品は、保存が利くが、価格は輸入乳製品の影響を受ける。



- 昭和30年代までは、牛乳・乳製品用途を混合した一本の生乳価格で乳業に出荷し、乳業側が用途を選択



- 合理的な牛乳価格が不明瞭。この結果、生乳需給の緩和期に乳価交渉が停滞。



生乳の用途別取引と需給調整の考え方

- 乳価の安定と牛乳の安定供給のためには、用途別取引を前提に牛乳需要に合わせて生乳を乳製品に仕向ける（需給調整）とともに、不測の変動分にも対応できる乳製品生産能力の確保・維持が重要。
- 牛乳の市場環境は、これまで、この需給調整の枠組みが支えてきた。

・牛乳は、保存性が低く、様々な要因で供給過剰と価格暴落が起こりやすい。

例えば、冬だけでなく、冷夏でも需給が緩和。災害による供給網の乱れでも余剰が発生。また、今後の人口減の影響も懸念。
更に、酪農生産体制構築に3～5年以上必要。

・昭和40年代以降、生産者向けの乳価を安定させ、消費者に牛乳を安定供給する枠組みが徐々に確立。

①牛乳の需給調整としての乳製品仕向け

・これまで、①用途別取引により牛乳の需給と価格を透明化し、
②その牛乳需給に合わせて生乳を乳製品に仕向けてきた。

・今後も、不測の変動分にも対応できる乳製品生産能力を確保・維持することが重要。

②牛乳の市場環境

・これまで、牛乳という商品の市場環境は、牛乳及び酪農の性質を踏まえた、供給過剰と価格暴落を防ぐための左記の枠組みが支えてきた。

